

「手を取つて居る。」「是れ、何處に御病人が居りますか？」と云ふ時分、和は先づ入つて参つた和が一か、和の貴下には先ずある傍でございませう、微候大きに喜んで此處かね、宜うございます。私が受

合つた、大丈夫ですよ！屏風を掛いては居られねわ、種々聞くこともあつたらしく、ウーンと苦んで居りまして、三人で廻へ付けて居る、和一は探りながら其處へ進み、一痕かしこ置きなさい、宜いかね？胸から下腹を摩り下して居たが便中から取出した紙、それに筒を添へてビタリ貼着させると成る其の前へ入れて下駄に當るのを其の前へ入れたら減さぬ筒を得得しことを告げまし

「お前が鍼をしたのか和」
「オ、ハエ二本刺した
ら悉皆沈靜しました」
驚いた山瀬琢一が極に臨つたとばかり思つて居た和一が江戸に居て加之癖に僅む此家の家内を二本の鍼で治めたといひ只露いて孫御主人此者は俺の弟子でございますが如何うして道腰に上手になつたか、まア一緒に来い和一、恙々に來い和一、恙々

檢校が屋傳流と申す劍術に關した遺物を選置きまして今も留方方は是を學び操振活と稱に就て大師別室を得ろざいでござい、先是本年の秋に因四江の島辨財天に至記いたし鐵腕の妙手を得たといふ杉田松枝の通話話を以て孝出度讀めたいとし

大方があるもの、加之辨財天の社の有る傍でございませう、微候大きに喜んで此處に屋敷を拵へ住む時に三百石の御加増合して八百石、身分は御旗下の内布衣以上實に立派なものですが、然して關東總檢校といふ官位を又授けられた、茲て講堂を造へて盲人に按摩治及鍼術を教へました後に山瀬琢一の門人三鳥安一が此の誠を襲て足も猶且將軍の侍醫となり號を元興院と申しました、偕此の杉田松枝は大和郡山の佐村山村の農民でありましたが一心不亂に劍術を學びまして盲人でありながら旗下に執立られたは實以て孝出度こそ、今日も東京本所一ツ日に總検屋敷と申して地名が残つて居ります、元祿の七年六月の廿六日年八十二を以て沒しましたが、其の跡を襲きました三局檢校が屋傳流と申す劍術に關した遺物を選置きまして今も留方方が是を學び操振活と稱に就て大師別室を得ろざいでござい、先是本年の秋に因四江の島辨財天に至記いたし鐵腕の妙手を得たといふ杉田松枝の通話話を以て孝出度讀めたいとし